

## 第6回新炭素資源学国際シンポジウム 学生ディベートセッション報告

グローバルCOE「新炭素資源学」拠点  
学生ディベートセッション担当学生一同

第6回新炭素資源学国際シンポジウム(2010年11月12、13日、九州大学筑紫キャンパス)において、九州大学筑紫地区のG-COE学生7名が企画、運営を担当して学生ディベートセッションを開催しました。

第4回新炭素資源学国際シンポジウムの際に行った九州大学と上海交通大学の学生ディベートワークショップ(平成21年12月14日)では、その場で「Ways to decrease your carbon footprint」、「Development and environment, which one goes first?」、「Do you think the other energy resource in the future?」、および「What do you think about the protocol proposed during Copenhagen Climate Change Conference」が提示され、日中の学生がテーマの中から自由に1つを選択して、意見を述べ、それについて議論をするという形で行われました。しかし、九大G-COE学生からの発言はほとんどなく、上海交通大学の学生に終始圧倒されていたとのことでしたので、今回は事前に設定して臨みました。

発展途上国の電力使用量は年々増加しており、これらの国々はより多くの電力の安定的供給を必要としています。世界で最も多く使用されている火力発電は、発電時に石油や石炭などの化石燃料を燃やすことにより、地球温暖化の一因と言われているCO<sub>2</sub>を排出するため、先進国を含めて、現在の水準を超える利用拡大は行なうべきではありません。一方で、原子力発電は発電時にCO<sub>2</sub>を排出しないため、今後の発展途上国における電力の安定供給手段の候補のひとつであると言えます。この前提のもとに、ディベートセッションは、「原子力発電を積極的に採用し、先進国が発展途上国に技術提供すること、あるいは発展途上国において原子力発電所を建設、普及することへの課題」をテーマとしました。新炭素資源学において重要なCO<sub>2</sub>排出削減に対して、現時点で安定的に電力を供給できる技術として原子力発電に焦点を置き、発展途上国に技術提供、普及を提案することにより、地球温暖化は先進国だけの問題ではないことを

広く認知することを中心テーマとしました。加えて、国際社会での活躍を目指し、英語によるディベート力を身につけることも本セッションの大きな目的です。

第6回新炭素資源学国際シンポジウム(平成22年11月12~13日)の最終イベントとして、約1時間半に渡り留学生を含む九大生75人が参加して学生ディベートセッションを行いました。担当の7名のG-COE学生があらかじめ作成した資料をもとに概略を説明したのち、前述の原子力発電に関するテーマに対して賛成派、否定派に分かれて頂き、経済、環境、安全性等の3つについて議論するという形で行いました。経済の観点からは、賛成側は原子力発電の1kWhに必要な費用が2.5円しかかからず、将来のエネルギー需要に十分な経済性をもった供給が得られるのに対し、太陽光、風力等の費用は、建設時に金額がかかり、かつ安定供給を行うことは難しいという意見が出ました。一方、否定側の意見は、原子力発電は維持費に費用がかかり、長年研究されている石炭

火力発電が最も有効なエネルギー供給源ではないかなど、経済性だけでなく技術にも争点が集まり、議論が活発に行われました。また、環境、安全性の議論は、原子力発電において単にCO<sub>2</sub>が発生しないという点に注目するだけではなく、原子力発電時に生じる放射性廃棄物の処理を的確に行わないと、地球環境、および人体に深刻な影響を及ぼすのではないかとという視点が重要であるとの意見が出されました。議論は放射性廃棄物の処理、リサイクル技術の向上、また、石炭火力発電に生じる廃棄物処理の簡易性などにも及び、環境、安全性の枠組みの中で幅広い意見交換がされました。

当初の予定である技術提供、普及が必要か否かではなく、原子力発電が必要か否かに焦点が集まりました。しかしながら、この議論を通して、CO<sub>2</sub>発生が及ぼす地球温暖化問題は先進国だけではなく、発展途上国も取り組むべき課題であることの再認識を得る機会になりました。

今回は、前回と異なり九州大学生同士でのディベートのため、日本人学生も積極的に議論に参加することができました。また、事前にテーマを決めておいたことも、議論が活発になった原因だと思います。ただ、残念なことに、留学生の発言が目立ったのも事実であ

ります。次回は、今回の経験をもとに良いところは伸ばし、改善すべき点は改めていくことで、研究だけでなくG-COEの中心的課題であるグローバルな人材育成に極めて有効なディベートの技術習得を目指していきたいと思っております。

### 《担当教員より》

G-COEは、グローバルに活躍できる人材を育成することを目指した教育プログラムであり、新炭素資源学G-COEでも、英語教育カリキュラムを組み込むなどして国際化に対応できる人材の育成をはかっている。その成果は国際会議での発表などでは十分に生かされていると思われるが、一方で、ディスカッションやディベートにおいてはさらなる経験が必要だと感じている。特に日本人学生は、英語力の問題だけではなく、ディベートに慣れていないことも原因であると考え、第6回国際シンポジウム中に学生ディベートセッションを設けた。

7名の学生(森 裕一、花田 賢志、芝山 聖史、朴 柱日、佐藤 伴光、櫻井 靖紘、山本 圭介)を担当者とし、必要に応じてアドバイスを教員数名を配置したが、担当学生が事前の企画、セッション運営をこなした。セッションの締めくくりとして発言した永島

点リーダーの「I enjoyed the session very much.」に象徴されるように、担当学生の企画と見事なセッション運営、参加学生による活発な議論は、所期の目的を概ね満足したものであった。しかし、担当学生の報告にもあるように、日本人学生のさらなる積極性が求められることも事実である。英語力の向上だけでなく、日常生活においてより自発的・積極的に質問やディスカッションをすることを習慣づける努力が必要と思われる。グローバルに活躍する研究人材の育成を目標とするG-COEとしては、このような機会を提供することが必要であることを再認識するとともに、学生にとって本セッションがさらに研鑽を積み契機になることを期待する次第である。なお、新炭素資源学G-COEでは、国際シンポジウムの企画や運営を通して企画力や国際力を養うことを目的とした「新炭素資源学国際演習」を必修科目(1単位)に指定しているが、上記7名の学生に対して今回のパフォーマンスをもとに単位を認定したことを付記しておく。

